

「宗教と社会」学会
第27回学術大会
プログラム・要旨集

*The 27th Annual Meeting of
the Japanese Association for the Study of
Religion and Society*

Program and Abstracts

8-9th of June, 2019

Kyoto Prefectural University

2019年6月8日(土)・9日(日)

京都府立大学 下鴨キャンパス

「宗教と社会」学会第 27 回学術大会
2019 年 6 月 8 日(土)・9 日(日)
於：京都府立大学 下鴨キャンパス

目次

日程表.....	1
個人発表・テーマセッション一覧.....	2
個人発表要旨.....	4
テーマセッション要旨.....	22
会場案内図.....	26
交通アクセス.....	28

連絡先

「宗教と社会」第 27 回学術大会実行委員会
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5
京都府立大学 川瀬研究室
TEL 075-703-5275 (川瀬)
E-mail : jasrs2019@gmail.com
大会ホームページ : <https://jasrs2019.blogspot.com/>

「宗教と社会」学会第27回学術大会

日程表

2019年6月8日(土)・9日(日)
京都府立大学 下鴨キャンパス 稲盛記念会館

会場	受付	稲盛記念会館	1階	廊下
	大会本部	稲盛記念会館	1階	廊下
	常任委員会会場	稲盛記念会館	2階	会議室
	編集委員会会場	稲盛記念会館	2階	211教室
	総会	稲盛記念会館	1階	104教室
	個人発表会場	稲盛記念会館	1階2階	104・205・206教室
	テーマセッション会場	稲盛記念会館	2階	205・206教室
	休憩室	稲盛記念会館	1階	102教室
	書籍・抜刷頒布コーナー	稲盛記念会館	1階	廊下
	懇親会会場(8日)	稲盛記念会館	1階	Deli Café たまご

日程

6月8日(土)

11:00~	常任委員会	(稲盛記念会館	2階	会議室)
11:30~	受付	(稲盛記念会館	1階	廊下)
12:30~17:20	個人発表	(稲盛記念会館	1階	104・205・206教室)
17:30~18:20	総会	(稲盛記念会館	1階	104教室)
18:30~20:30	懇親会	(稲盛記念会館	1階	Deli Café たまご)

6月9日(日)

9:30~	受付	(稲盛記念会館	1階	廊下)
10:00~11:50	個人発表	(稲盛記念会館	2階	205・206教室)
12:00~13:00	常任委員会	(稲盛記念会館	2階	会議室)
12:00~13:20	編集委員会	(稲盛記念会館	2階	211教室)
13:30~16:00	テーマセッション	(稲盛記念会館	2階	205・206教室)

個人発表・テーマセッション（発表題目と発表者）一覧

6/8（土） <個人発表>発表：25分、質疑応答：25分

※一覧中の■は司会担当者を示します。

	第1会場(稲盛記念会館 2F 205)	第2会場(稲盛記念会館 2F 206)	第3会場(稲盛記念会館 1F 104)
12:30~13:20	伊藤耕一郎 精神世界団体とその役割 ■栗津	真鍋一史 日本人の宗教意識の諸相・構造・性格— 「日本人の国民性調査」にもとづく探索 ■白波瀬	山田実季 在家者として「出家」を生きる—タイ、 タンマガーイ寺職員の事例から— ■矢野
13:30~14:20	山口瑞穂 日本の新聞・雑誌・宗教専門誌に見 るエホバの証人報道の分析 ■栗津	宮嶋俊一 祈り研究における実証的・統計的研究と 体系的・現象学的研究の協働について ■白波瀬	小堀 真 現代タイにおける仏教寺院の宗教的権 威と社会貢献活動—世界価値観調査 データを用いた時系列分析を通して— ■矢野
14:30~15:20	栗津賢太 新宗教と千年王国—1950-60年代に おける創価学会の展開と使命シンボ ル— ■平藤	湯川洋久 日本における Not Religious But Spiritual ■大谷	徳田 剛 過疎地寺院対応に関する基礎的考察 ■櫻井
15:30~16:20	三浦尚仁 アンゴラ・世界救世教における体験 談の諸相—アフリカに進出した新宗 教の事例として— ■平藤	塚田穂高 即位の礼・大嘗祭と「宗教」「政教分 離」「国家神道」—平成の代替わりにお ける議論から— ■大谷	辻井敦大 現代社会における墓と〈不死性の保 証〉—先祖祭祀研究の新たな展開に 向けて— ■櫻井
16:30~17:20		高山善光 宗教教育の欠落が日本人にもたらしてい るもの—宗教概念批判的な観点から— ■大谷	碧海寿広 禅の科学—昭和期の諸形態— ■櫻井

17:30~18:20 総会(稲盛記念会館 1F 104)、18:30~20:30 懇親会(稲盛記念会館 1F Deli Café たまご)

6/9（日） <個人発表>発表：25分、質疑応答：25分、<テーマセッション> 2時間30分

※一覧中の■は司会担当者を示します。

	第1会場(稲盛記念会館 2F 205)	第2会場(稲盛記念会館 2F 206)
10:00～ 10:50	<p>長島大輔 ボスニア・ヘルツェゴヴィナのムスリムの 集団的アイデンティティについて—ウラ マー長、チャウシェヴィチを例に—</p> <p style="text-align: right;">■塚田</p>	<p>藤井修平 現代デンマークの宗教—「最も世俗的な 国」における宗教の役割—</p> <p style="text-align: right;">■小林</p>
11:00～ 11:50	<p>桂 悠介 イスラームへの改宗に至る経験と論理—イ スラームをめぐる「共生」に向けて—</p> <p style="text-align: right;">■塚田</p>	<p>滝澤克彦 現代社会のリスクをめぐる超域的議論のた めの宗教学的枠組みに関する一考察— 「超越的なもの」とローカリティの関係 をめぐって—</p> <p style="text-align: right;">■小林</p>
	テーマセッション A 会場(稲盛記念会館 2F 205)	テーマセッション B 会場(稲盛記念会館 2F 206)
13:30～ 16:00	<p>問芝志保 『現代人の信仰構造』の成果と課題</p>	<p>平藤喜久子 宗教をめぐる調査・研究の倫理—現代的課 題にどう向き合うか—</p>

精神世界団体とその役割

伊藤耕一郎（関西大学大学院）

精神世界はこれまで個人的なものとして捉えられてきた。「宗教を離れても宗教的関心事は追求可能」、「聖なるものとの関わりを個人の経験や資質・特性の側面から見たもの」と言われ、共同体が形成されてもそれは営利的セミナーやサークルだった。

しかし2016年から現地調査を続けてきた結果、それらとは違う、共同性を持つ人々が現れ始めていることが分かってきた。これらの共同体は一般社団法人やNPO法人といった形態を取り、目的はイベントやセミナーの開催ではなく、精神世界の中に根付いている思想の実現にある。

この流れを、単純に精神世界から宗教への過渡期と捉えるのは難しい。それは、どの団体の目的も「ワンネスに繋がること」を追求しているからである。

ワンネスとは「宇宙の真理、宇宙意思、大宇宙の生命」等とも呼ばれ、創造主は宇宙の真理であり、神々も人間も動物も植物も無生物も全てその現れである、というニューエイジ的汎神論、「すべては1つ」を言い換えた言葉である。日本の精神世界で使われ始めたのは比較的新しく、1990年代になってからである。

1990年代後半から現在まで、日本における精神世界の牽引者はこのワンネスに繋がることを非常に重視しており、それが「地球の次元上昇への備えになる」と教えてきた。

そのために精神世界に深く関わる人は、自分の魂の段階を上げてワンネスに繋がる為に、セラピーを受け、セミナーに参加して霊能技法を会得しようと努力を重ねてきた。

精神世界団体はこの上に、新しい思想・教義を生み出すことなく成立している。地元のパワースポットになっている神社での儀礼からワンネスに繋がることを目指す団体、商業指向から脱却して新しい秩序を追求し、1つなるものを知ろうとする団体など、具体的活動は違うがワンネスとの繋がりの実現という点では、共通している。

しかし、共通項目であるワンネスとの「繋がり方」に関する認識は1つではない。密教的思想を背景に持つ精神世界観では、大日如来が宇宙・森羅万象・生命の全てに片鱗を現しており、これに繋がるのが、大日如来つまりワンネスなる存在に繋がるとする。

一方、宇宙意思であるワンネスは、マイクロコスモスなる人間の意思の中にも存在するという精神世界観もあり、ここでは生命エネルギーと肉体、男性原理と女性原理が1つになった時にワンネスに繋がるとしている。

また、霊能力を重視する精神世界観では行動こそがワンネスへの繋がりであり、いつも新鮮な能力に更新していくことを重視している。このように、方法に関する認識は違うものの、ワンネスに繋がるということが大切であるという点については一致しているのである。

このワンネスとの繋がりに関する姿勢が、精神世界団体の特徴でもある。それぞれの精神世界団体の中でも、そこに属する個々人のワンネスとの繋がりに関する認識は統一されていない。しかし構成する人々の認識は違っていても、その団体の活動方針は一貫しているように思える。精神世界団体は同じ概念に対して違う認識を持つ人々を包含しつつも1つの団体として成立している。

一方宗教教団においても、新新宗教の中には精神世界と同様、神的存在を「宇宙の真理・宇宙意思・大宇宙の生命」としているところがある。GLA、霊波之光、トゥルース教などがそれに該当する。しかしこれらの宗教教団では同じ言葉で神的存在を現し、それとの繋がりを重視しているにも関わらず教義上、歩みよることはない。GLAへの聞き取りでは「そもそも宇宙意思への認識が違った時点で別の神である」との回答を得ている。

繋がり方の認識が違っていても、1つの団体として成立している精神世界団体と、繋がり方の認識が違った時点で別のものであるとする新新宗教教団。本発表は精神世界団体へのインタビューを中心とした現地調査を研究手法とし、精神世界団体がどのような方向に向かって行くのかを明らかにすることを趣旨とする。

日本の新聞・雑誌・宗教専門誌に見るエホバの証人報道の分析

山口瑞穂（佛教大学大学院）

日本におけるエホバの証人の信者数は2016年時点で21万人にのぼる（『エホバの証人の年鑑』2017年）。エホバの証人は1870年代終盤に創設されたアメリカ合衆国発祥の宗教運動であり、日本宣教の開始は1926年のことである。前千年王国論的な救済観をもつこの教団においては、日本発祥の新宗教の多くが標榜するような現世利益や社会変革への志向性はみられない。それだけでなく、先祖祭祀の拒否など、日本の文化的な環境においては軋轢が生じやすい信条をもっており、親族の葛藤や輸血拒否の問題、体罰や二世信者の苦悩を指摘するルポルタージュも多い。

本報告では、このような特徴をもつエホバの証人が現在の教勢を築くまでの間に、日本ではどのように評価されてきたのかを、新聞・雑誌の報道から検討する。報告者はこれまでの間に、宗教運動論や布教戦略といった宗教社会学的な視点から日本におけるエホバの証人の展開を検討してきたが、宗教運動の展開において、社会的な評価による影響は回避できないものとなっている。したがって本報告で検討する報道の位置付けとは、布教活動を展開する教団側と、それを受容する人々の間に位置し、教団のイメージや評価を提示することにより、日本社会におけるエホバの証人の展開過程に何らかの影響を与えてきた一アクターといえることができる。

検討において使用する資料は、宗教情報リサーチセンター（RIRC）の「宗教記事データベース」に収録された新聞・雑誌・宗教専門誌である。そのため、そこに収録されていない1985年よりも前の情報については扱うことができないが、それ以降の横断的な検討を目指す。

とりわけ本報告においては、報道件数の推移や変遷だけでなく、これに対する教団側の対応にも注意を払う。報道する側と教団側が社会に向けて発するメッセージは相互に参照され、その相互作用によって当該教団への評価が構成されていく側面もあるからである。報道に対するエホバの証人の対応で特徴となっているのは、①教団レベル・個人レベルのいずれにしても、教団に対する批判的な報道にはほとんど応答してこなかったこと、②これとは対照的に、格技拒否の問題や輸血の問題については当該記事の担当記者たちに積極的にはたらきかけてきたこと、③その上で、信者を原告とした裁判で勝訴することにより、軋轢を生む信条や実践を自己決定権の問題として提示してきたことがあげられる。

時系列で見ると、社会から否定的な意味で輸血の問題が注目を浴びることとなった川崎市での交通事故（1985年）の後、体育の授業における格技の拒否に関連した訴訟、輸血拒否に関連した訴訟、信者の家族や牧師が関係した「保護説得」に関する訴訟が順に起こされている。いずれも信者側からの提訴となっているが、そこにおける世界本部や日本支部からの指導は看過できない要素である。格技と輸血の問題については、それぞれ1996年と2000年に信者側の訴えを認める最高裁判決が下されたが、その経過が新聞・雑誌・宗教専門誌の報道に及ぼした影響についても考察する。

この間の報道を見ると、芸能人の合同結婚式や元スポーツ選手の脱会で統一教会（現、世界平和統一家庭連合）が大きく報道された1993年、そして地下鉄サリン事件（オウム真理教、当時）が起きた1995年の翌年にエホバの証人の報道件数も増え、その後、2003年に報道件数は急速に減少し、以降、あまり多くは報じられていない。

これらの変遷の考察により、報じる側／教団側、双方がどのような方策を採ったのか、その帰結として、海外発祥の新宗教であるエホバの証人がどのような存在として日本の人びとに提示され、その評価が構築されてきたのかを明らかにする。

新宗教と千年王国

—1950-60年代における創価学会の展開と使命シンボル—

栗津賢太（上智大学）

本報告では日本の代表的な新宗教教団のひとつである創価学会の展開に関するこれまでの研究を再検討する。その際に文化人類学的な千年王国運動の視座から新たな問題設定をおこなうことによって、新宗教研究の生産性を高める議論を提起したい。鈴木広による大規模な社会調査的手法による研究以降、日本の創価学会に関する量的な把握をめざす社会学的な研究は行われず、質的調査へと変化している。宗教社会学においては、教団発展段階論、教団ライフサイクル論、教団ライフコース論等、組織形態の展開に関する問題に集中し、主に制度化論の枠組みにおいて議論されてきた。

千年王国運動に関する研究は、主に文化人類学において発展したが、それを日本の新宗教にあてはめた研究はそれほど多くない。唯一の例外は対馬路人によるものであるが、その多くは、天理教や大本教、璽宇等の明らかな終末論的要素を教団の発生や教義の中心に据えている教団に類型論的に当て嵌められている。文化人類学における千年王国運動に関する研究は西欧の植民地主義に対応するものとして長いスパンで構想されており、その射程は長く広い。それらがフィールドとしているのはアフリカ、アジア、ミクロネシア等である。この中で、日本だけが例外だという必要があるだろうか。実際、欧米の研究者たちによって、明らかに日本もこうした国々のひとつと考えられていたことが分かる。このことを学問自体に暗黙裡に含まれている植民地主義と批判することもできるし、それを否定するつもりはないが、同時に、日本宗教例外論も日本人研究者の持つバイアスのひとつではないだろうか。本報告では千年王国運動と預言者という概念を分析概念へと拡張し、その観点から1950年代から60年代における創価学会の展開過程を分析したい。

創価学会には明らかに千年王国運動的な性質がある。『立正安国論』が一種の預言書であったように、日蓮の仏教を引き継いだ創価学会にはこうした予言的要素は色濃く刻印されている。創価学会の展開を追っていくと、いくつかのターニング・ポイントとされる出来事がある。折伏大行進、ブロック制の導入、政界への進出、政教分離原則の徹底と国立戒壇の否定、平和・文化路線への変更等々である。こうした展開を、例えば言論出版妨害事件で社会的な批判が強くなったことへの対応であり、世間向けのプロパガンダであるとする評価がこれまでは研究者の間でも一般的であった。しかし、こうした路線変更は組織の維持・運営、活性化に必要な活動を生み出す基本的な方針となっていく。その延長線上に多くの反戦平和活動、教育文化活動が活発に展開された。

このことは、これまでの分析にみられるように、創価学会の発展は、高度成長を背景に農村から都市に流入した都市下層人口によって支えられ、貧・病・争の悩みを持つ都市下層民が自らの成功と幸福の実現を願って入信し、彼らのコミュニティを形成することによって成長したということとは矛盾していない。むしろそれらの活動に、当時の創価学会会長たち（戸田城聖・池田大作）は宗教的かつ文明論的な意味と使命感を与えたのである。こうした innovation はいつ頃から始まったのかは難しい問題であるが、言論出版妨害事件以前から、少なくとも池田会長体制以降には、こうした革新は進められていた。

信者たちは教団の教えや活動を通して、社会問題や世界情勢を理解している。その意味で、教団指導者は終末論を強調しているか否かにかかわらず、一種の預言者として分析する必要があるだろう。かつてマックファーランドが、ティリッヒを援用した「使命シンボル」という用語によって、これを指摘し、対象化しようとしたが、こうした視点がその後の研究にいかにかき入れ、現在にも生産性があるのか否かを再検討する必要があるだろう。

アンゴラ・世界救世教における体験談の諸相 —アフリカに進出した新宗教の事例として—

三浦尚仁（ハーバード大学大学院）

多くの日本の新宗教が海外において外国人信者を獲得している。公称の信徒数は誇張され、実際にその宗教だけを信じている「信者」という形態はごく限られているとしても、新宗教が外国人の一部に受け入れられつつある傾向があることは確かである。本発表はアンゴラ共和国における世界救世教の活動をアフリカに進出した新宗教の一例として取り上げ、主に体験談の諸相について検討する。

世界救世教(以下、救世教)は大本の信徒だった岡田茂吉(1882-1955)が1935(昭和10)年に創立した宗教で、浄霊・自然農法・芸術を活動の三本の柱とし、静岡県熱海市に本部がある。救世教は1955(昭和30)年にブラジルで布教を始め、1991(平成3)年から同じポルトガル語圏のアンゴラにおいて宗教活動を展開した。教団の統計によると、アンゴラでの信徒数は2010年までには約60,000人に達しており、現在アフリカ大陸のうち26カ国に合計約80,000人の信者がいるという。その大多数はアンゴラに集中し、続いてモザンビークに約6,000人、コンゴ民主共和国に約3,500人、サントメ・プリンシペ民主共和国に約1,500人、南アフリカに約500人という順である。

ブラジルに進出した多くの新宗教の中でも救世教、生長の家、PL教団、創価学会、崇教真光等は日系のエスニック・グループを超えて非日系人の間に広く浸透していったものとして知られている(ブラジルにおいて救世教の信徒数は2001年の段階で約310,000人とされ、そのうちの97%は非日系人である)。先行研究が示す通り、アンゴラにおいても救世教の信徒の占める非日系人の割合は非常に高い(99%以上)。日本から直接布教を始めるケースと異なり、同じポルトガル語圏のブラジルを通して展開していった布教の流れが重要と思われる。なお、救世教のアンゴラ名はIgreja Messiânica Mundial de Angolaで、メシアニカ(Messiânica)と呼称される(ブラジル同様)。

様々な視点からアフリカにおける新宗教の活動を追求できるが、本発表はアンゴラ・世界救世教における体験談の諸相・分析を一つの出発点とする。体験談の内容・構成・公演等进行分析することにより、宗教的な考えがどのように当事者の日常生活において関連性・現実性を持つようになるかについて検討する。

信仰の体験談の構成により、時間的(入信以前・入信以後)境界と空間的(教団外・教団内)境界の感覚がどのように作り出され、それがいかに人々を宗教的共同体に引き寄せる効果があるか否かを一つの問題として捉える。体験談を語ることを通して、信仰者は自らの信仰の原点を思い出し、教団布教のナラティブの文脈の一部として自分の信仰体験を見るように促されていく。抽象的・外来的と思われそうな様々な宗教的概念を信徒の間で具体化・ローカライズする重要なメカニズムの一つとして体験談が機能する。体験談の実践は外国からの宗教運動(すなわちアンゴラにおける日本発生の新宗教)に参加する人々が言語と文化の違いを越境する助けになっていることを本発表で提示したい。

ブラジルにおける救世教の活動・先行研究についても触れた上で、アンゴラで2016年8月から2017年6月までのフィールドワークで得た情報を検討したいと思う。まだ研究の初期段階ではあるが、アンゴラ(特に首都ルアンダ)の歴史・社会環境とアンゴラにおける救世教の展開との関連性を追求する。日本にルーツを持つ宗教が、異なる文化・価値観を持つ社会で信徒を獲得していくという実態を、異文化布教並びに、海外における日本の宗教・文化の展開を広いテーマとして考えてみたい。

日本人の宗教意識の諸相・構造・性格 —「日本人の国民性調査」にもとづく探索—

真鍋一史（青山学院大学）

I. はじめに

本発表は、大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 統計数理研究所の知的財産の一つである「日本人の国民性調査」の二次分析をとおして、日本人の宗教意識の諸相・構造・性格を探る理論的考察と方法論的検討の試みである。

II. 「日本人の国民性調査」の宗教意識に関する四つの質問項目に関する理論的考察

ここでの理論的考察においては、まず、宗教意識の「次元の細分化」というところに焦点を合わせる。そのため、宗教社会学の領域における「概念化」と「操作化」に関する知的インベントリが利用される。

＜問 11 あなたは、先祖を尊ぶ方ですか、それとも尊ばない方ですか？＞

この質問項目には「伝統的な生活上の慣習の次元」と「先祖崇拝という宗教的信念の次元」が含まれている可能性がある。後者については、さらに「具体的・個別的な先祖へのメモリアリズムの次元」と「抽象化・一般化された信念の次元」の区別が提案される。

＜問 12(a) あなたは、何か信仰とか信心とかを持っていますか？＞

この質問項目については、「belonging without believing の次元」と「believing without belonging の次元」の二つが重要なポイントとなる。

＜問 12(b) いままでの宗教にはかかわりなく、「宗教的な心」というものを、大切だと思いますか、それとも大切だとは思いませんか？＞

この質問項目については「幅の広い宗教意識の次元」と「幅の狭い宗教意識の次元」、「無宗教の次元」と「無神論の次元」、「宗教的な心の次元」と「religious mind の次元」などの区別が分析課題となる。

＜問 13 あなたは、「あの世」というものを信じていますか？＞

これまでの宗教意識調査では、「あの世」と並んで「神・仏」「天国・極楽・浄土」「地獄」「霊」などの存在について尋ねられてきた。この調査では、それらのなかから一つだけが取りあげられたため、「次元の細分化」の議論が限られたものとなる。ここでは、「教義の次元」と「フィーリングの次元」あるいは「あれもこれも次元」と「あれかこれかの次元」の区別が示唆される。

つぎに、理論的考察は、宗教意識をめぐる「因果モデルの構築」へと進められる。このような仮説的な「因果モデル」は、同じく宗教社会学の先行諸研究についての「文献研究」にもとづく諸命題を踏まえる。それは「原因変数：ソシオ・デモグラフィック諸項目（性、年齢、学歴、地域）」→「宗教意識に関する 4 項目」→「結果変数：個人的・社会的な意識や価値観の諸項目（問 14 幸福か、問 18 人は信頼できるか、問 28 自分のしあわせか、世の中のためか、問 38 環境保護は重要か）」という関係性の流れで構成される。

III. 「日本人の国民性調査」の宗教意識に関する四つの質問項目に関する方法論的検討

以上のような理論的考察を踏まえて、それらを確認するためのデータ分析を試みる。それは、①単純集計、②相関マトリックス、③尺度分析、④因子分析、⑤クロンバックの α 係数、⑥諸変数間の因果関係を示す平均値の折れ線グラフ、などである。

データ分析の結果は、①を踏まえてなされた②～⑤の分析から、宗教意識に関する 4 項目間の相関係数、再現性係数、因子負荷量、 α 係数の値は大きなものではなく、4 項目の「信頼性」のレベルは高いものとはいえない。そして、⑥の分析から、「折れ線グラフ」は仮説どおり右肩上がりのパターンを示しているものの、その角度は大きなものではなく、これら 4 項目の「妥当性」のレベルも高いものとはいえない。

IV. おわりに

以上の結果が、日本人の宗教意識の実情を捉えたものなのか、それとも測定の方法論的問題を示したものなのか、の検討が今後の重要な課題となる。

祈り研究における実証的・統計的研究と体系的・現象学的研究の協働について

宮嶋俊一（北海道大学大学院）

ハイラーの『祈り』は、祈りの現象学的研究の古典であるが、そのキリスト教中心主義的・西欧中心主義的な傾向が批判されてきた。よって、体系的・現象学的宗教研究は、より客観的・科学的な研究手法を必要としている。他方で、統計的な国際比較調査などを通じた比較研究においても、体系的・現象学的宗教研究の成果を援用することが可能であるし、またそれが有益である。本発表では、「祈り」を例としながら、統計的な研究手法に体系的・現象学的な研究を接続することで開かれる可能性について考察したい。

統計的なアンケート調査、とりわけ国際的な比較調査を行うことで、特定の宗教伝統の価値観に強く縛られることなく「祈り」について研究する可能性が開かれてきた。ただし、どのような質問項目を設定するかという問題は残る。諸宗教が用いている言語を一般化・普遍化することには困難が伴うからである。そこには、宗教言語の翻訳という宗教研究における本質的な問題が存在している。かつて宗教現象学が取り組んできたことのひとつは、まさしくこの翻訳の問題であり、一定の成果を上げてきたものの、そこで示された概念を学術的な分析概念ではなく、宗教的な本質概念であると考えたところに問題があったのである。ハイラーの祈り研究はまさにその典型である。よって国際的な比較調査の結果も、一方で、それが何らかの実体を示しているのではなく抽象化されたデータであることを認識することが必要だ。だが他方でそれが個別具体的な状況の中で何を意味しているのかを考える作業も必要となる。例えば、「祈り」について、「あなたは祈りますか (Do you pray?)」という問いかけを考えた場合、毎朝仏壇にお供えをして御先祖様に向かって「祈って」いる人たち、創価学会の百万遍唱題をしている人たち、一日に5回サラートをを行うムスリムの人たち、すべての人たちの行為を「祈り」として一括りにできるのだろうか。また、これらの人々に「どれくらいの頻度で祈りますか」と問うことに、どのような意味があるのだろうか。こうした問題を避けるために質問項目を精緻化・具体化し、例えば「あなたは仏壇を拝みますか」と問うたとしても問題は残る。近親者を喪失してすぐ仏壇の遺影に語り掛けるように「祈る」場合と、習慣的・慣例的に仏壇に供え物をして手を合わせて「祈る」場合、それらを同じ行為をみなしてよいのか。一般化・抽象化すればするほど問いかけは単純化し、統計調査の質問項目として使いやすくなるが、個別具体的な状況は捨象されてしまう。よって一般化・抽象化の方向での作業と個別具体的な状況を考える作業、両方を行いつつ、「落としどころ」とでも言うべき項目内容を作成することが重要となる。

こうした課題を踏まえつつ、質問項目作成に際し、ハイラーを批判的に継承したライナー・フラッシュェの祈りの分類項目 (Reiner Flasche, 'Gebet', in: *Handbuch religions-wissenschaftlicher Grundbegriffe*, Bd.2, 1990, S.456-468.) を参照できないか考えたい。フラッシュェによる「祈り」の分類項目の概略は以下の通りである。a)誰が (個人の祈り、集合的な祈り)、b)何を (自由な祈り、祈りの決まり文句、祈りの詩作、告白的な祈り)、c)いかにして (無言の祈り、内面的な祈り、エクスタシー的な祈り、熱狂的な祈り、儀礼化された祈り)、d)いつ (自発的な祈り、儀礼化された祈り、祭式の祈り、祭式として繰り返されるが時間的に拘束されていない祈り、宗教的なサイクルの中に位置づけられた祈り)、e)どこで (閑かな部屋、宗教的な共同体、宗教的な空間、その他状況が規定された空間、f)なぜ (何のために) (苦悩、不安、劣っているという感情、感謝、義務、償い)、g)どこに向けて。彼はこれらを祈り研究の指標として提起する。このような、具体的な祈り研究に基づきつつ抽出された指標は、適切な質問項目の作成に寄与しうると考える。

日本における Not Religious But Spiritual

湯川洋久（西南学院大学）

本発表は、日本における Not Religious But Spiritual（以下 NRBS）の状況についてルックマンとスィングドローの理論を元として分析することを目的とする。

NRBSとは「自分は宗教的ではないが、スピリチュアルなことには関心がある」人、即ち、特定の宗教を信じたり特定の宗教団体に属したりするものではないが、スピリチュアルなものごと（霊性に関する、神秘的な、精神世界に関するものごと）には関心を持っている人のことを指す。ルックマン『見えない宗教』（1976）によると、世俗化により宗教は衰退ひいては消滅するとの理論が1960年代頃まで盛んだったが、実際には、衰退したのは制度的に特殊化された宗教に過ぎず、宗教は「私事化」されるに至った、と論じる。

他方同じく日本語版で（ルックマン1976）、「宗教の制度的特殊化がいわゆる西欧の世俗化の主要因子」だが、「日本の宗教史の場合、この制度的特殊化が十分に行われていないとすれば、私の仮説（ママ）である社会的に“見えにくい”新しい宗教の形態は、日本にはあてはまらない」と論じ、同じ日本語版付録でヤン・スィングドローは（ルックマン1976）「日本の神道は、いわゆる文化宗教、すなわち一般社会からさほど分化していない宗教とみなされている。一方、神道が制度化された宗教であることもまた否定できない」とする。この考えによれば、日本における NRBS はその出現過程が異なることになり、西欧 NRBS とは思考内容が異なるのではなかろうか。本発表はこの点を分析する。

まず、アメリカの NRBS が出現する根拠について、具体例が論じられている。まず Mercadante2014はその根拠を、意識的・無意識なクリスチャニティの排他性ある教義への違和感としている。これをルックマンと統合させて理解するならば、制度的に特殊化された宗教において「宗教の公式モデルと個人の究極的意味体系との不調和が収束不可能な事態に落ち込む」結果「私事化」した一環として NRBS になるということではなかろうか。次に、Packard2015は、典型的な例として、教会で嫌な経験をしたことが教会から離れる例としている。これも「宗教の公式モデルと個人の究極的意味体系との不調和が収束不可能な事態に落ち込」んだ結果、組織内で無理が起きた例と考えてもよいのではなかろうか。

これに対して日本では宗教、特に神道は、例えば教義も厳密には持っておらず、また一般社会からさほど分化していないことから、文化として宗教を受け入れていると考えられる。即ち、ルックマンによるならば宗教の制度的特殊化が西欧ほど進んでいないと言えよう。島田(2017)によると、日本では多くの人々が、新年には初詣に行き、占いをし、結婚式には縁起の悪いとされる日を避け、またヨガとレイキなどのスピリチュアルなことも関心が高い。これは、ルックマンによれば宗教の制度的特殊化が西欧ほど進んでいないため、日本の NRBS は、既存宗教には抵抗感をもともとさほど持っていない現れなのではないかと考える。そして、抵抗感を持っていない割には既存宗教に実際に帰属することがないのは、神道由来の、教義のない気楽さを日本人は味わっている故なのではなかろうか。

そこで当学会プロジェクト学生宗教意識調査(2014)を用いロジスティック回帰分析を行った。

仮説1 日本における NRBS は、伝統宗教に親近感を持つ。

仮説2 日本の NRBS は、排他性ある教義を信じる必要性を感じない。

仮説3 日本の NRBS は、伝統宗教から悪い経験をしていない。

仮説4日本のスピリチュアリティは多くの人にとって親近感あるものだが、この世の理解のための深淵なものではない。

その結果、仮説1、2、4は肯定されたが、仮説3は肯定されなかった。

参考文献

島田裕巳「日本人の信仰」2017 扶桑社新書

T.ルックマン「見えない宗教」1976 ヨルダン社

Packard, Josh., “Church Refugees” 2015 group.com

Mercadante, Linda A., “Belief without Borders” 2014 Oxford U. Press

即位の礼・大嘗祭と「宗教」「政教分離」「国家神道」

—平成の代替わりにおける議論から—

塚田穂高（上越教育大学）

2018年11月22日、秋篠宮文仁親王は「大嘗祭は皇室の行事として行われるもので、ある意味宗教色が強いものになります。宗教色が強いものを国費でまかなうことが適切かどうか、これは平成の大嘗祭の時にもそうするべきではないという立場だったわけで、多少意見を言ったぐらいですけども、今回も結局踏襲することになったわけですね」「宗教行事と憲法との関係はどうなのか、という時に、私はやはり内廷会計で行うべきだと思っています。…大嘗祭自体は絶対にすべきものだと思います。ただ、できる範囲で、言ってみれば身の丈に合った形で行うのが、本来の姿ではないかなと思います」（要旨）と、平成からの代替わりについて述べ、波紋を呼んだ。

興味深いのは、こうした発言のなかに、「宗教」とは何か、「天皇」「皇室」とは何か、「宗教」「皇室」と国家との関わりはどのようなもの（が適切なもの）かといった問いが、含まれている点である。よって、こうした問いに迫る際に、——種々の政教分離をめぐる問題や訴訟と同様に——即位の礼・大嘗祭という事例に着目することは有効と言える。

本報告では、平成への代替わりにおける即位の礼・大嘗祭の例を取り上げる。日本国憲法下で初となる平成の即位の礼・大嘗祭は、1990年11月に行われた。その前後には、その行事の性格や内容、公金支出、政治家らの公的関与をめぐる、問題視する議論も高まっていった。1990年9月には、公金支出の差止等を求める訴訟が大阪地裁に起こされた。この動きは続き、原告は約1,700名にまで増えた。

1995年3月の大阪高裁判決は、請求自体は棄却したものの、大嘗祭については「神道儀式としての性格を有することは明白」で、「政教分離規定に違反するのではないかとの疑義は一概には否定できない」、即位の礼についても「国民を主権者とする現憲法の趣旨に相応しくないとと思われる点がなお存在することも否定できない」と指摘した（上告なし）。

これらの過程では、多様な「宗教」や「政教分離」、そして「国家神道」についての観点や認識が交錯したことが推測できる。こうした動きについては、政教分離に関わる判例として憲法学領域では一定の注目を集め、「擁護」／「批判」両陣営から賛否両論が噴出したが、前述のような問題意識のもとで宗教研究の領域からなされた研究の蓄積は乏しい。

よって本報告では、平成の代替わりにおける即位の礼・大嘗祭をめぐる、特に「宗教」「政教分離」「国家神道」についてどのような観点から議論がなされたかを、訴訟における原告側と被告側の言説、ならびに「擁護」側／「批判」側の宗教（的）勢力の言説を対象として解明することを研究課題とする。主たる資料としては、裁判資料・報道資料・教団資料等を用いる。

まず、戦後日本の政教分離訴訟とそのなかの即位の礼・大嘗祭訴訟を論じた諸研究をレビューし、その議論の特徴と宗教研究の領域からの検討意義を示す。

次に、即位の礼・大嘗祭訴訟の展開と議論の内容を概観する。原告側・被告側が提示した観点と、判決が認め、示した観点を整理する。

続いて、「批判」側として、この問題について継続的に関わってきた日本基督教団 靖国・天皇制問題情報センターの言説に注目する。その上で、原告側の主張との間の異同について分析する。

「擁護」側としては、神社界（『神社新報』紙等）ならびに政教関係を正す会等の言説を中心に検討する。これらの言説と、訴訟における被告側の主張との異同を比較検討する。

以上のような作業は、他の政教分離訴訟についての検討結果とつぎ合わせを進めることで、戦後日本における「宗教」概念ならびに「政教分離」概念の構築・浸透過程を明らかにするのに寄与するだろう。また、冒頭で示したような現在進行中の即位の礼・大嘗祭を考える際にも有益な視角を提供することになるとと思われる。

宗教教育の欠落が日本人にもたらしているもの

—宗教概念批判的な観点から—

高山善光（広島大学）

目的

日本では、長らく公的な場において宗教教育が行われてこなかった。本論では、この宗教教育の欠落がわれわれの文化に与えている影響を、宗教概念批判以降の「宗教」の観点から考察する。

背景と問題

明治になって「宗教」という概念が輸入されるのとほぼ同時期に、宗教教育はすでに人々の問題の関心になっている。周知のように、明治時代初頭では、西洋的な知識の教育と、儒教を中心とする伝統的な教育という価値観の間で論争が起こっている。その後、1899年に明治政府が発した「一般ノ教育ヲ宗教外ニ特立セシムル件」によって私立の学校以外では表立った宗教教育ができなくなるが、一方で「教育勅語」に基づいた天皇崇拜的な価値観をもつ教育は、公立でも行われてきたとされる。

この公立校における宗教教育の禁止と、天皇崇拜的な宗教教育を同時に行うことの矛盾を可能にしてきたのが、よく知られている「神道非宗教説」である。現代の価値観から言えば、この説は神道以外の「宗派教育」を禁止する一方で、神道的な「宗派教育」を許可するという意味において不可解な説であるが、「宗教」概念そのものに注目する本論では、「この不可解な説がどうして起こり得たのか」という疑問は主たる議論の対象として扱わない。ここで問題とするのは、諸々の「宗派」を包括する「宗教」という一般的な概念に対する反省的な教育が、ここには欠けているという、その事実である。戦後から現在における宗教研究の立場では、戦前は神道あるいは天皇を中心とした「宗教教育」が行われていたが、戦後はその反省のために「宗教教育」が行われていないという見方が中心的である。しかしこのような見解は、戦前を他者的な目線で反省し、当時の価値観を「宗教」というカテゴリーに分類するのが公に可能となった後の見解にすぎない。本論の立場にたてば、実際のところ戦前も「宗派教育」は行われていたかもしれないが、「宗教」という、より包括的な概念に対する反省的思考を養う教育は行われてこなかったといえる。

そしてこの「宗教」という概念に対する反省的な教育が欠けているという事実は、戦後も同様である。現在、宗教教育は、特に公的な場で——場合によっては宗教系の私立の学校においても——行われていない。結果として、戦前も戦後も、日本において「宗教」というより包括的な概念に対する反省的思考を養う教育は、未だに行われたことがないのである。

現在においても、宗教教育が問題になる場合には「生命の根源」「聖なるもの」「畏敬」といった要素が重要視されている。これに対して、特定の宗派教育を抜きにこのような要素を身につけることができるのかという議論があるが、それはもっともなことである。宗教概念批判の影響下において、現在このような要素は特定の宗派におけるイデオロギー的な要素だとされ、「宗教」研究の領域からは距離をとっているが、宗教教育に関する議論にはそれがまだ残っていると見える。

これに対し、宗教概念批判的な立場にたつ本論では、宗教教育の重要性を、宗派教育的な色彩の強い「生命の根源」「聖なるもの」「畏敬」といった要素の涵養には求めない。本論では、「宗教」教育の重要性は、あくまでその包括的な「信念の体系」——このような言い方は、これまで展開してきた私論的には正確性を欠くが——に対する反省的な思考が可能になり、それが明文化できるようになることにある、という立場にたつて議論を展開する。議論の後半では、このような、自身のもつ「信念の体系」に対する反省的思考を養う教育の欠如が、価値観の多様化を阻み、集団内に暗黙的に成立しているらしい明文化されない「信念の体系」を察することが、すなわち「空気を読む」という行為が、蔓延しているのだと指摘するつもりである。最後に、この「空気を読む」＝「信念の体系を察する」という行為の利点と欠点について論理的に考察したいと考えている。

在家者として「出家」を生きる

—タイ、タンマガーイ寺職員の事例から—

山田実季（京都大学大学院）

近年の宗教研究では、宗教／世俗の自明性を問い直し、人々の実践をめぐる現実の中から、それらの関係性を再考する必要を迫っている。この問題は、近現代の上座仏教社会において生じてきた仏教運動を検討する上でも重要な課題である。本発表では、タイにおける新しい仏教運動として注目を集めるタンマガーイ寺で働く職員の人々を事例に、宗教（出家）／世俗（在家）のあり方を、かれらの実践の中から捉え直すことを目指す。

上座仏教の正統的教説では、その理想的境地である涅槃に到達するためには、世俗を離れ、出家することが至高の実践であるとされている。一方で、世俗に留まる在家者の仏教実践といえ、自身の宗教的な修練よりも、出家者の托鉢に応じたり寺院に寄進したりなど、出家生活の支援という側面が大きい。タイではこれをタンブン（積徳行）といい、在家者はこれによって現世や来世におけるよりよい生を得ることを目指している。しかし、上座仏教社会におけるこうした出家／在家の区別は、近現代の社会変動に伴い変化が生じてきた。

R. Gombrich と G. Obeyesekere は、19 世紀後半以降に現れたスリランカ都市部における仏教運動について検討し、それを「プロテスタント仏教」として定義づけた。その最も重要な要素の一つは、従来の上座仏教社会における出家至上主義を問い直し、在家者も涅槃に至るよう修練すべきだとする考え方である[R. Gombrich and G. Obeyesekere 1988]。本発表の対象であるタイのタンマガーイ寺も、この「プロテスタント仏教」の潮流に位置づけられる仏教運動である。タンマガーイ寺とは、バンコク隣県のパトゥンタニー県に約 400 万 m²もの敷地を有する上座仏教寺院であり、タンマガーイ式瞑想という独特の瞑想実践を広めている。タイ政府による経済開発政策、都市化、教育水準の向上など、タイ社会が大きな変動期を迎えていた 1960 年代初頭、この瞑想方法を実践する小さな修行集団として始まった運動は、1970 年代から都市新中間層を中心に急速に広まり、現在では日本を含む世界各国に支部を有する大組織へと成長を遂げた。タンマガーイ寺がタイ社会における従来の上座仏教寺院と異なる大きな特徴の一つは、瞑想を通じて、出家者のみならず在家者も涅槃へ至るよう努力することが強調されている点である[矢野 2006]。

このように「プロテスタント仏教」の特徴を有するタンマガーイ寺において、本発表で焦点を当てるのは、寺の運營業務に携わる職員の実践である。かれらは僧侶とは異なり、正式に出家しているわけではない。しかし、寺院内に居住し寺の様々な業務に従事する一方で、日々読経や瞑想実践など心身の修練に励む修行者でもある。こうした寺院（出家者集団）「内」の在家者については、例えば蔵本が、在家の管財人としての浄人や僧院管理委員会という存在の重要性を指摘している[蔵本 2014]が、あくまで出家者の支援という側面においてである。しかし、本発表で問うてみたいのは、在家者でありながらも「出家」という同じ理想を共有するかれらにとっての「出家」生活の意味やその可能性についてである。

本発表が示すのは、1) タンマガーイ寺職員が仕事によって積むブン（功德）は、一般在家者のタンブンとは区別され新たな意味合いを持つこと、2) 職員にとってタンマガーイ寺で働くことの宗教的意義は、寺の外部社会における仕事との対比によって立ち現れ、また揺らいでいく様相である。ここにおいて宗教（出家）／世俗（在家）の関係を検討し、かれらの望む「出家」生活が実現される可能性と限界について考えたい。

<参考文献>

Richard Gombrich & Gananath Obeyesekere. 1988 “Protestant Buddhism”. *Buddhism Transformed Religious Change in Sri Lanka*. Princeton University, 202-240.

蔵本龍介 2014 『世俗を生きる出家者たち—上座仏教徒社会ミャンマーにおける出家生活の民族誌』法蔵館。

矢野秀武 2006 『現代タイにおける仏教運動—タンマガーイ式瞑想とタイ社会の変容』東信堂。

現代タイにおける仏教寺院の宗教的権威と社会貢献活動

—世界価値観調査データを用いた時系列分析を通して—

小堀真（青山学院大学）

1. 目的

本研究の目的は、タイの宗教団体、特に仏教寺院における社会貢献活動がその宗教的権威にどのような影響を及ぼしているのかを計量的に検証することにある。具体的には、2011年にタイで起きた大規模洪水被害時の仏教寺院の救援活動が、タイにおける宗教団体への信頼感にどのような影響を与えたのかを2007年および2013年の世界価値観調査（World Values Survey）のデータを用いて計量的に検証する。

タイにおいては仏教を信仰する割合が9割を超えており、その存在感は非常に大きい。他方、タイは近年目覚ましい経済的發展を遂げており、文化的・社会的に大きな変動期をむかえている。そのような状況下において、タイでは2011年に全国的な大規模洪水が発生した。その被害総額は1兆4250億バーツ=457億ドル（2011年時レート）に及んだとされる。このような甚大な災害に見舞われた際、仏教寺院がさまざまな救援活動を行ったことを櫻井らが調査・報告している（ジュタティップ・櫻井 2013）。櫻井らの報告した事例がタイの多くの地域においても見られたのであれば、それがタイの仏教の宗教的権威に何らかの影響を及ぼした可能性がある。Chavesは世俗化を宗教的権威の衰退と定義づけたが（Chaves 1994）、そうであるならば、タイの仏教の宗教的権威の変化の要因を分析することにより、タイの仏教が世俗化を含めどのように変化していくのかを確認することができる。今回はHoffmanにならい（Hoffman 1998）、宗教的権威の操作的定義として宗教団体への信頼を用い、計量的な分析を行う。具体的には以下の仮説とそれに対する操作的定義の検証を行う。

P 宗教団体の社会貢献活動は宗教的権威を上昇させる

H タイの洪水時における仏教寺院の支援活動は宗教の信頼を上昇させる

2. 方法

前述のリサーチクエスションに従い、世界価値観調査（World Values Survey）の2007年と2013年のタイデータを用いて時系列分析を行う。具体的には2007年のデータと2013年のデータを用い、宗教団体への信頼度を従属変数としたOLS（重回帰分析）で検証する。

3. 結果

分析の結果、社会経済的地位（Social Economic Status）関連変数や、地域変数・都市規模といった地理属性、また礼拝頻度や宗教団体所属などの宗教関連変数を統制しても、調査年が大きな効果を持つことが明らかとなった。このことは、2007年と2013年の間に起こった「何か」がタイの仏教団体への信頼度を上昇させたことを意味する。この時期に起こった、タイにおける宗教団体の信頼度を上昇させる要因となり得たものは何かを考えると、それは洪水時の仏教寺院の救援活動である可能性が高い。

4. 議論

今回の結果を受けて、本研究における検証仮説を、計量的にある程度立証することができたのではないかと考える。しかし、この検証結果をもって他の国や地域においても同様にこの仮説が当てはめられることができると考えるのは早計であろう。ただし、今回の分析結果は、宗教団体の社会貢献活動が当該地域における宗教団体のプレゼンスを左右する一つの要因となりうることを示唆した結果といえるのではないか。

文献

Chaves, M., 1994, *Secularization as Declining Religious Authority*, *Social Forces* 72:749-774.

Hoffman, J., P., 1998, *Confidence in Religious Institutions and Secularization: Trends and Implications*, *Review of Religious Research*, Vol.39, No.4, pp.321-343.

ジュタティップ・スチャリクル・櫻井義秀, 2013, 「タイにおける洪水問題と寺院の社会活動」櫻井義秀編『タイ上座仏教と社会的包摂--ソーシャル・キャピタルとしての宗教』明石書店, pp.229-252.

過疎地寺院対応に関する基礎的考察

徳田 剛（大谷大学）

2000年代に入って日本の総人口が減少局面へと移行したことで、とりわけ地方部における少子高齢化や都市部への人口流出がいつそう進行し、中山間地域などでは多くの集落が将来的な「消滅危機」に瀕している。それとともに、こうした地域に点在する仏教寺院の多くが檀信徒数の減少や後継者不足等の問題により、その存続が危ぶまれている。

これらの問題については、各仏教教団・宗派ともに喫緊の政策課題として認識されており、具体的な調査の実施や対策に乗り出しているところもある。また、超宗派による過疎問題連絡懇談会が2015年に発足し、加盟する宗派間での研修会や情報共有、合同調査などが進められている。しかしながら、現在進行中の人口動態や各地域の趨勢を念頭に置きつつ仏教寺院の現状と今後を分析・考察したような学術的な研究については、櫻井・川又編（2016）、中條（2017）、木越ほか（2018）、徳田ほか（2019）などを例外として、十分とは言えないのが現状である。

とりわけ、人口減少と寺院運営のあり方については「地域差」がある。人口規模は小さくても伝統的な仏事や習俗が維持されている地域では寺院と檀信徒の強い結びつきのもとに運営されているところもあれば、都市部に見られるように人口は多くても住民の移動が頻繁で地域の間関係が希薄なところでは寺壇関係が弱く、人口の多さが寺院運営にプラスに働かないようなケースもある。中長期的に見れば日本全体で人口減少と少子高齢化が進み、寺院運営が厳しくなるという一般的な見方はできるが、その現われ方は宗派・地域・寺院ごとに違ったものとなっている。そうした中で、どのような対応・対策が有効であるかについて見極めることは決して容易な作業ではない。

また、地域コミュニティや檀家集団の縮小の進行度合いによっても、問題の表れ方や寺院運営の課題・対策のポイントが変わってくる。筆者らの調査によれば、郷里に高齢の檀信徒が健在で他出した子・孫世帯が行き来しているような人口構成・移動パターンの存在が確認されており、そうした状況では他出子世帯と地域・寺院の関係形成が鍵になる。しかしながら、郷里の老親が亡くなると帰郷の機会も大きく減り、家じまいや墓じまいといった形を含め寺壇関係の途絶が起りやすくなるので、取りうる対応の選択肢は大きく減り寺院運営はいつそう厳しいものとなることが見て取れる。

本報告では、このテーマに関する各教団・宗派の取り組み、メディアによる報道や問題提起、学術的な先行研究および報告者による論点整理（徳田（2018）など）を概観したうえで、報告者も参加・関与した人口減少地域における寺院・集落調査（フィールドワーク）の成果も踏まえながら、過疎地に立地する寺院の現状把握と対応すべき諸課題について確認する。これらの作業を通じて、地域社会の人口動態と各地の仏教寺院の持続可能性に関する基礎的な考察を行う。

－参考文献－

- 木越康・東館紹見・山下憲昭・徳田剛・藤枝真・藤元雅文、2018、「地域社会と寺院の抱える問題点の研究—課題と分析視角—」『真宗総合研究所研究紀要』35号、大谷大学、1-21
- 中條暁仁、2017、「過疎地域における寺壇関係の持続可能性—他出子の動向に注目して—」『教化学研究』8号、120-140
- 櫻井義秀・川又俊則編、2016、『人口減少社会と寺院—ソーシャル・キャピタルの視座から—』法蔵館
- 徳田剛、2018、「『過疎と寺院』問題をどう捉えるか—モビリティ論の視点から—」日本宗教学会第77回大会（於：大谷大学）、開催校特別企画②「人口減少時代における地域と寺院のあり方研究」報告資料
- 徳田剛・山下憲昭・松岡淳爾、2019、「中山間地域に立地する真宗寺院の現状と課題—人口動態と他出子対応の視点から—」『真宗総合研究所研究紀要』36号、大谷大学、1-15

現代社会における墓と〈不死性の保証〉

—先祖祭祀研究の新たな展開に向けて—

辻井 敦大（首都大学東京大学院）

高度経済成長期における社会変動は、伝統家族としての「家」を解体した。それに伴い「家」の先祖祭祀のシンボルとして墓を継承するという規範は崩れつつある。そのなかで1990年代以降、散骨や樹木葬、永代供養墓などの「墓を建てない、継承しない」という選択肢が現れた。しかしながら、現在においても「家」の先祖祭祀のシンボルとみなされてきた従来の墓は可能である限り、継承が望まれている。そして多くの人々によって墓参りは実施されつづけている（NHK放送文化研究所編 2015）。

以上の矛盾した状況に対して、本報告では従来の先祖祭祀研究を再検討し、「家」なき現代社会における墓の建立・継承の意味を読み解く研究視座を提起することを目指す。その観点から本報告では、これまでの日本社会学で行われてきた先祖祭祀研究を整理した上で、ジグムント・バウマンによる不死性（immortality）に関する社会学理論を検討し、今後の先祖祭祀研究の課題を展望する。

具体的には、まず有賀喜左衛門らの日本社会学の家・同族研究において、墓の建立・継承は「家」の社会構造と関わる先祖祭祀の機能として分析されてきたことを示す。その点から、森岡清美、孝本貢、井上治代らの戦後日本における先祖祭祀の変容を探る研究でも、先祖祭祀の変容が「家」の変容と連動して生じたと理解されたことを指摘する。しかし、日本特殊性を持つ家・同族研究をベースにした先祖祭祀の変容論では、「家」が解体された現代において墓が建立され、継承が望まれているのを理論的に説明することが不可能であった。そのため、そうした研究群のなかで孝本が「日本社会において先祖祭祀を考える場合、家との関連は不可避であることはいうまでもない。しかし、そこに限定されるべきではない」と指摘していたことに注目する（孝本 2001: 254）。

その視点をもとにバウマンの不死性に関する議論を整理し、人々の墓の建立・継承を〈不死性の保証〉のための戦略の一環として読み替えることを目指す。バウマンの不死性の議論は、人間が死すべき運命にある存在論的な不安のなかで、自身の永遠の持続という不死性を望むことに注目する。そこで、人々が疑似的であれ何かしら形で不死性を望み、疑似的な不死を可能とするために文化を作ってきたことを論じる（Bauman 1992）。このバウマンの議論を踏まえ、不死性を示す現象の理解や体系的な不死性に関する関心取り上げる不死性の社会学（Jacobsen ed. 2017）の立場から、現代における墓の建立・継承の意味を検討する可能性を論じる。すなわち、「家」や家族の機能としての墓の建立・継承の側面ではなく、人間存在の不安に関わる墓の建立・継承の側面を解明する可能性を示す。さらにバウマンの社会学理論におけるキリスト教の西洋特殊性に基づく理論的限界を踏まえつつ、人々の墓の建立・継承に関わる行為を〈不死性への努力〉、〈不死性の保証〉と読み替えることを提起する。その点から人々が個人の意味世界のなかで〈不死性への努力〉として墓の建立・継承を行う側面と、様々な社会的アクターが人々の死後の連続性を保証、すなわち〈不死性の保証〉を担う側面を明らかにする経験的研究への展望を開くことを目指す。

〈文献〉

Bauman, Zygmunt, 1992, *Mortality, Immortality and Other Life Strategies*, Polity Press.

Michael Hviid Jacobsen ed., *Postmortal Society: Towards a Sociology of Immortality*, Routledge.

NHK放送文化研究所編, 2015, 『現代日本人の意識構造』NHK出版.

孝本貢, 2001, 『現代日本における先祖祭祀』御茶ノ水書房.

禅の科学

—昭和期の諸形態—

碧海寿広（武蔵野大学）

近年、仏教瞑想から宗教性を脱色させたマインドフルネスが、世界的な人気を博している。人気の理由の一つとして、瞑想が人間の身心にもたらす肯定的な効果が、科学的に実証されつつある、というのがあるだろう。宗教に由来する瞑想が、宗教的な真理とはあまり関係のないところで、科学の裏付けのもと現代社会に浸透しはじめているわけだ。宗教に忌避感を示す現代人が、宗教的な背景を有する瞑想を受容する理由の一端はそこにある。

だが、瞑想に科学的裏付けを持たせようとする動きは、最近になって始まったものではまったくない。アジアの「仏教国」でありかつ、いち早く近代化を進め、西洋由来の科学（技術）を貪欲に取り組んできた日本では、瞑想を科学する学問や実践が、これまで少なからず行われてきた。本発表では、なかでも最も熱心に取り組まれてきた、禅の科学的な研究に注目する。この「禅の科学」は、どのように展開され、社会に伝えられ、その意義をどう考えるべきか。これらを明らかにするのが、本発表の目的である。

禅を仏教等の宗教的文脈とは異なる科学的観点から研究する営みは、明治時代にはじまる。当時の神経生理学の知見に基づき禅の悟りの構造を分析した原坦山や、東京大学の初代心理学教授として禅の心理学的研究に着手した元良勇次郎などが、代表的なところだろう。とはいえ、明治期あるいは大正期には「禅の科学」の試みはまだ少なく、業績や言説が量産されるようになるのは、昭和期とりわけ戦後になってからである。

代表的な人物の一人が、佐藤幸治である。京都大学等を拠点に心理学者として活躍した佐藤は、『心理禅』（1961）や『禅のすすめ』（1964）などの著作をとおり、宗教者ではなく心理学者としての立場から、禅の実際的な効果や現代的な意義を説いた。禅の体験的・心理的な効果に意識を注いだ佐藤は、やがてLSDの服用が禅体験に通じると論じるに至り、物議を醸す。そこには、禅が僧侶の師弟関係から外れて独自に展開した際に起きる問題が、鮮明にあらわれていた。

一方、東京大学医学部の神経科医長を務めた平井富雄は、脳波測定に基づく禅の効果の研究を本格的に行った。『坐禅健康法』（1974）、『座禅の科学』（1982）などの著作がある。平井は、座禅による脳波の変化を確かめながら、禅の治療的な効用や、創造性の開発につながる可能性を論じた。そして、禅以外の他宗教の瞑想的な実践のなかにも、同様の意義があるはずと考えるようになる。

これらの「禅の科学」は、いずれも人間の能力開発を志向し、この点で戦後の自己啓発書の増大などと密接に関連した動きと理解できる。そこには、マインドフルネスが世界のビジネスマンに好んで受容される現状と、同様の構造がある。また、禅の心理主義的な理解の推進に対し、僧侶たちからの批判が寄せられたのも、昨今の仏教者よるマインドフルネス批判と通じる。

仏教の伝統を背負う僧侶たちからの反発を呼び起こしつつ、仏教（禅）が科学の視点から能力開発に援用される事態を、いかに理解すべきか。瞑想による身心変容を達成する仏教が、本来的に広い意味での能力開発につながるのには、疑いない。一方、人間の身心への関心のみに閉塞した「禅の科学」や、その能力開発的な志向には、個人とその能力を超えた次元を重んじる日本の伝統的な仏教理解とは、相容れない部分も確実にあるだろう。

こうした問題に関しては、鈴木大拙の言動が考察を深める際の手懸かりになる。大拙は、禅を心理（体験）主義的に捉え過ぎた誤りを、しばしば批判される（Robert H. Sharf, “Buddhist Modernism and The Rhetoric of Meditative Experience”, 1995）。だが、戦後の「禅の科学」に対し、彼は一定の距離を示した。禅を心理主義的に再解釈した大拙は、なぜ禅の心理的な効果の測定などには共感しなかったのか。立ち入って検討してみたい。

ボスニア・ヘルツェゴヴィナのムスリムの集団的アイデンティティーについて —ウラマー長、チャウシェヴィチを例に—

長島大輔（東京経済大学非常勤講師）

この研究発表では、ボスニア・ヘルツェゴヴィナのムスリム（以下、ボスニア・ムスリム）の宗教的最高指導者であるウラマー長（レイス・ウル・ウレマー）を1914年から1930年まで務めたチャウシェヴィチ Džemaludin Čaušević が、ボスニア・ムスリムの集団的アイデンティティーについてどのように考えていたかということについて、以下の三つの観点から論じる。まず、チャウシェヴィチが、ボスニア・ムスリム社会におけるイスラームの役割をどのように捉えていたかについて考える。つまり、彼が当時のイスラーム世界のモダニズムの影響を受けて、理性と信仰、精神的豊かさと物質的繁栄、現世における幸福と来世における救済は、いずれも両立しようと考え、「時代の精神」に基づく「正しい」信仰によってのみ社会が発展しようと考えていたことを明らかにする。二つ目は、チャウシェヴィチがボスニア・ムスリムの一体性をいかにして作りだそうとしていたかについて考える。ここでは、彼が、礼拝や教育においてアラビア語ではなく母語を使用し、改良アラビア文字で表記することを提唱したことを紹介する。また、彼自身は、当時の伝統的ウラマーの主張に反して、ボスニア・ムスリムの服装に関して極めて進歩的な考えを持っていたことを明らかにする。ここで言語・文字と服装を問題にするのは、これらが当時のボスニア社会において、各集団の独自性を体現するものと考えられていたからである。三つ目に、チャウシェヴィチが、国家、ネーション、ナショナリズムについて、どのような立場をとっていたかということについて明らかにする。すなわち、ハプスブルク帝国の崩壊と南スラヴ人統一国家の形成という激動の時代を生きた彼が、ボスニア・ムスリムがどのような国家体制の下で、いかにして存続していくべきだと考えていたかについて述べる。ここでは、彼がボスニア・ムスリムの社会を宗教共同体からネーション共同体に変革するという考えを全く考えていなかったということが明らかにされる。

結論は以下になる。チャウシェヴィチは、同時代のイスラーム・モダニズムの影響を受けて、ムスリム社会の後進性を克服し、「時代の精神」に適合的なイスラームによって社会を発展させようと努めた。また、彼は、セルビア・ナショナリズムとクロアチア・ナショナリズムによる同化の働きかけを受けて、同時代の他のムスリム知識人同様にムスリム共同体の一体性を強く意識していたが、彼が重視したムスリム共同体の集団的アイデンティティーは、純粋に宗教的価値を基礎にするものであった。つまり彼の頭の中では、ムスリム共同体の一体性、主体性は、ネーション概念には結びつかなかった。

最後にこの研究が、従来のボスニア・ムスリムの集団的アイデンティティーに関する研究にどのように貢献し得るかということについて考える。従来の研究は、ボスニア・ムスリムのナショナル・アイデンティティーに関する研究に大きく偏っていた。つまり単純化すれば、ボスニア・ムスリムがクロアチア人のナショナリズムとセルビア人のナショナリズムとの対抗関係の中でどのようにナショナリズムを発展させてきたかという議論である。また従来の研究では、ボスニア・ムスリムの集団的アイデンティティーが、今日のボシュニャク人としてのナショナル・アイデンティティーに至るまで、単線的に発展してきたということが前提とされている。この研究は、このような従来の研究では軽視されてきた問題に光を当てるものとなるだろう。すなわち、ボスニア・ムスリムの集団的アイデンティティーを巡る主張にはナショナリズムの枠組みではとらえきれない要素が確かに存在していたのであって、その要素を無視してボスニア・ムスリムの集団的アイデンティティーの変遷を論じることは出来ないということである。

イスラームへの改宗に至る経験と論理

—イスラームをめぐる「共生」に向けて—

桂 悠介（大阪大学大学院）

本発表では、今日世界的に増加するイスラームへの改宗プロセスのうち、日本での従来の研究では見過ごされてきた、「結婚」以外の経験的・論理的要因の重要性を明らかにする。これを通して、ムスリムの増加に伴う社会的な緊張や分断に抗する「共生」に向けた一つの可能性を提示する。

日本におけるイスラームへの改宗はすでに一世紀以上の歴史を持ち、「日本人ムスリム」は現在ボーン・ムスリムや日本国籍取得者を含めると4万人、その内改宗ムスリムは1万4千人程度であると推定される。

従来の日本の一般的な言説や先行研究では、イスラームへの改宗を「結婚による改宗」と「自発的な改宗」に二分した上で、結婚が主要因であるとされてきた。一方、「結婚」以外の要因は未だ明らかでない。例えば、日本人改宗者にアンケート調査を行なった田村（2007）は「結婚」以外に「海外経験」の重要性を述べているものの「なぜ今イスラームに入信する人が増えているのかについての明確な理由は不明である」と述べている。その後も改宗を主題に据えた研究はなされておらず、改宗に至る個々人の行為主体性（エージェンシー）は未だ十分に捉えられていないと言える。

一方、フランスやイギリスでは近年年間4～5千人が、米国では年間1万人以上がイスラームに改宗すると推定される欧米圏では、90年代から宗教社会学、人類学、イスラーム研究、ジェンダー・スタディーズなどの分野で研究の蓄積が進んでいる。

欧米圏の研究では、「結婚のための改宗」に還元される説明は「神話（Brice 2011）」に過ぎないといわれている。改宗の分類も、単に結婚によるものか否かにとどまらない。例えばBrice（2011）では、何らかの目的のために改宗に至る「便宜的改宗者」と、目的によらない「確信的・意識的改宗者」という分類が、Allievi（1998）では主に人間関係に由来する「関係的改宗」と、読書や議論などを通じた「理性的改宗」という分類がなされている。その上で共に後者の「確信的・意識的」で「理性的」な改宗の重要性が強調されている。

欧米圏の諸研究で提示されたこの「理性的」な要因を発表者が整理したところ、「神学」「科学」「哲学」「社会」的諸側面を見いだすことができた。神学的側面とは、元々信仰を持つか宗教に関心がある人の疑問がイスラームによって解決するというもので、科学的側面とは、クルアーンに記された胎児の生育過程などの科学的知識が改宗のきっかけとなるようなあり方を指す。哲学的側面とは、実存に対する問いや、真理の探究のような思想的な関心の先にイスラームにたどり着くような場合であり、社会的側面とは、個人の生き方だけではなく、社会の基盤としてイスラームに可能性を見出すようなあり方である。これらの諸側面は多くの場合、相互に重なり合いながら進展していく。

本発表ではこれらの先行研究を踏まえた上で、「日本人ムスリム」の41名分の「入信記」を主な分析対象とする。これらの改宗者の主観的な記述には、改宗プロセスにおける経験や理性的要因の諸側面がしばしば明確に現れており、改宗に至るそれぞれの行為主体性の一端を捉えうる。ここから日本の先行研究で重要視されてきた「結婚による改宗」のあり方を再検討し、また、従来看過されてきた結婚以外の経験と論理について明らかにする。

以上を通じて一般的に「異文化」として捉えられ、オリエンタリズムを始め「他者」化されてきたイスラームと日本社会との重なり合いや連続性を描き出すことで、イスラームをめぐる「共生」に向けた媒介としての改宗者研究の可能性を提示する。

【参考文献】

- 田村 渚（2007）「アンケートから見る日本人ムスリムの姿」『宗教学・比較思想学論集』（8）：75-85
Allievi, Stefano（1998）*Les convertis à l'islam. Les nouveaux musulmans d'Europe*. L'Harmattan.
Brice, M. A. Kevin（2011）*A Minority Within a Minority: a Report on converts to Islam in the United Kingdom*. Faith Matters.

現代デンマークの宗教

—「最も世俗的な国」における宗教の役割—

藤井修平（宗教情報リサーチセンター）

本発表は、現代デンマーク社会における宗教のあり様を以下の3つの観点から提示し、デンマークの宗教一般の概観を試みるものである。その際には「文化的キリスト教」の概念が当国における宗教の役割を理解するためのキーワードとなる。

デンマークは世界で最も世俗化が進んだ国の一つと言われている。社会学者のフィリップ・ザッカーマンは、デンマークを「神のいない社会」と呼んでいるが、彼の意図は宗教が存在しないということではなく、宗教の役割が近代化に伴い大きく変化したということである。その状況は、現在も国教の地位を有しているルター派プロテスタントの「国民教会」のあり方に顕著に見られる。世俗化の指標の一つとして用いられる礼拝出席率はデンマークでは非常に低いが、国民教会への所属は依然として高い水準を保っている。このことは宗教的な教義への信仰は薄いものの、特定のイベントへの参加は積極的に行うということを示しており、この状況は社会学者グレース・デーヴィーが「Believing without Belonging」と呼んだものとは反対の、

「Belonging without Believing」だと言えるだろう。デンマーク人にとって、国民教会は何よりも誕生から成人、結婚から葬送という、人生の節目をしるし付ける重要な儀礼を遂行してくれる存在であり、現代社会において福祉施設の一つとしての役割を担っていると言われている。本発表では現地で得られた資料を用いて、こうした国民教会との人々の関わりの様子を提示する。とりわけ成人式に相当する堅信礼は幅広く見られ、かつデンマークに特徴的な人生儀礼となっているので、詳細な記述を行う。

また、キリスト教が着目されるのはこうした人生儀礼においてのみではない。近年では移民の増加に伴い、国民のアイデンティティ教育の必要性が叫ばれるようになっており、その際にデンマーク的なものとして考えられたのが、キリスト教的な伝統ないし遺産であった。このような観点から、キリスト教的伝統を重要視する傾向が強くなっており、それは政治や教育などさまざまな局面で見られる。こうしたアイデンティティとしての宗教という見方は「文化的キリスト教」と呼ばれており、周辺諸国にも見られるものであるが、この概念についての検討も行う。

他方で、デンマークの宗教は多数派のそれに尽きるわけではない。国内には、移民がもたらした仏教やイスラム教、ニューエイジ的なスピリチュアル実践およびネオペイガニズムによる北欧宗教の復興運動なども存在している。本発表では、統計資料からそうした実践の全体像の把握を試みるとともに、そのいくつかの実例を提示する。

最後に、デンマークにおける宗教教育の現状についての調査結果を報告する。日本でも宗教教育の必要性はしばしば指摘されているが、その方法についてはさまざまな意見の対立が見られる。デンマークでは、公教育における宗教の授業は小中学校にあたる国民学校と高等学校にあたるギムナシウムの2段階において存在しているが、そのどちらにも大学の宗教研究が大きく関わっている点が特徴的である。とりわけギムナシウムに対しては宗教の教師の要請を大学の宗教学科が担っているため、ギムナシウムと大学の教育内容はほぼ連続している。また国民学校の授業に対しては、より教派的になろうとする近年の動きに対し、宗教学者が反対の声を上げている。デンマークで目指されているのは、特定宗派に偏らない、宗教学の知見に基づいた宗教教育だといえる。

本発表はこのようにして、多数派の国民教会と人々の関わりと少数派の宗教、そして宗教教育の現状を分析することによって現代デンマーク社会の宗教のあり様を提示することを試みるが、同時にこの分析をより広い文脈に位置付ければ、西欧社会で起こっている宗教の変容を理解する一助にもなりうるであろう。

現代社会のリスクをめぐる超域的議論のための宗教学的枠組みに関する一考察

—「超越的なるもの」とローカリティの関係をめぐって—

滝澤克彦（長崎大学）

かつて社会学者のU・ベックが指摘したように、近代における産業化の帰結として到来した「第二の近代」は「リスク社会」として特徴づけられる。そこでは、モダニティの持続的な発展および産業社会の存続可能性自体が、その前提としてリスクを内包している。そして、そのリスクはグローバルで多層的な連関をもつため、ますます不確実かつ予見困難なものとなってきた。特に、東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故によって、現代社会におけるリスクという課題が、自然科学的要因と人文社会科学的要因の密接に絡み合った極めて超域的性格をもつものであることが明らかとなった。リスクを前提として内包した現代社会では、科学的な営為自体が価値・倫理・信仰と分かちがたく結びついている。人々の生活における価値自体が科学技術を前提として成り立っており、それを脅かすリスクの回避が逆に科学的使命となるため、「幸福な生活とは何か」という哲学・倫理・宗教的問い自体が必然的に、命題として科学のなかに組み込まれるからである。このような文理を超えた超域的な課題としての現代社会のリスクに対して、宗教研究はどのような関与・貢献を行うことができるだろうか。本発表では、そのような分野を超えた連携の可能性を視野に入れながら、改めて宗教研究において「リスク」を論じるための枠組みについて考察する。

発表者は、長崎大学重点研究課題「「リスク社会」を生き続けるための人文社会科学の超域的な研究拠点形成」の共同研究プロジェクトを通じて、現代社会の「リスク」について社会学や経済学など他分野との学際的議論を重ねつつ、そのなかで宗教学がその課題について貢献しうる可能性について考察してきた。その結果、その要点が現代社会における「超越的なるもの」の所在にあるのではないかという考えをもつに至った。現代以前の社会においては「超越的なるもの」は社会の覆いの向こうにあって、リスクの源泉であると同時にリスクからの守護者でもある両義的なものとして存在していた。しかし、「第二の近代」においては個人化によって、社会という覆いが取り払われ、個人はリスクと直接的に対峙しなければならなくなった。社会の先にあった「超越的なるもの」はかつての神秘性を失ってしまったが、その残滓は新たな共同性を形づくる原資として社会的役割を維持している。しかし、問題はそのような共同性がかつてのものと同じではないということである。この変化を「超越的なるもの」とローカリティの変質という問題に注目しながら読み解くことが現代のリスクという課題に対する宗教学の課題ではないか（滝澤克彦「「リスク社会」における宗教—「超越的なるもの」の所在をめぐって」『多文化社会研究』5）。

本発表の目的は、以上の観点を踏まえた上で、「超越的なるもの」とローカリティの関係性についてより踏み込んだ議論を行うことである。特に、「第二の近代」の出現（再帰的近代化）による個人化のプロセスにおいて、ローカルな社会の強度がどのように失われてきたかを捉えるために、A・アパデュライの「内破」という概念と社会の「レジリエンス」に関わる議論を再検討しつつ関連づけることでその枠組みを構築する。さらに、そのようなローカリティの変質と「超越的なるもの」の関わりを論じることによって、現代社会のリスクをめぐる人文社会科学における超域的議論のため宗教学的枠組みについて理論的に検討したい。

『現代人の信仰構造』の成果と課題

代表：問芝志保（公益財団法人国際宗教研究所）

◆構成

【発表者】

高橋秀慧（大正大学大学院） 「『現代仏教界をめぐる宗教状況』の現在」

問芝志保（公益財団法人国際宗教研究所） 「都市の墓地問題の再検討」

大場あや（大正大学大学院） 「『宗教浮動人口』と骨仏—その先駆性と意義—」

黒崎浩行（國學院大學） 「都市流入者の宗教生活に関する研究実践としての共通性と特異性」

【コメンテーター】

小島伸之（上越教育大学）

◆趣旨説明

『現代人の信仰構造—宗教浮動人口の行動と思想—』（評論社、1974年）は、故藤井正雄（1934-2018）の代表作であるのみならず、現代社会における寺檀関係・葬送墓制の変容等を実証的に扱った重要な成果である。また著者以外に入手が困難なデータがふんだんに用いられているという意味において、大変貴重な学会の財産といえる。

書名の「現代人」は、高度経済成長期の離村向都により生まれた大量の都市移動家族、なかでも来住第一世代が都市で新たに創設した核家族世帯を指している。藤井は、死者が出た場合の葬儀や埋葬、供養の依頼先が未定である彼らを「宗教浮動人口」と呼び、その先祖祭祀を核とした伝統志向性や、宗派意識の希薄さ、「無縁化」に対する関心、経済事情と宗教行動の対応関係を解明した。また仏教の側についても、寺院分布や、浄土宗を中心とした都市寺院の活動実態、仏教宗派の教団改革運動の実情などを活写しており、さらには霊園業や葬儀社の動向にも詳細な分析を加えている。一方で、仏教寺院が今後直面しうる課題として、都市の流動性による離檀の増加や、生活慣習の変化に伴う宗教意識の変質などを指摘している。

同書の扱ったテーマは、公刊から45年が経過しようとしている今日も、多くの研究者の関心を喚起し続けている。そこで本セッションでは、日本の宗教社会学の研究史における藤井正雄の研究業績、および同書の位置づけを共有するとともに、その問題関心や各章で採用された調査方法、研究成果をあらためて確認し、そして公刊後の社会状況を視野に入れ、後続する次世代の研究者に託された課題群を照射してみたい。

本セッションの構成は、まず3名の報告者がそれぞれの研究関心と関わらせながら、同書のなかでも伝統仏教教団や寺院の現状と、近現代の葬送墓制に関する各論について検討する。そのうえで、藤井の研究業績の全体像を視野に入れるかたちで、宗教社会学研究史上における位置づけを探っていききたい。各報告者と報告の要旨は次のとおりである。

高橋秀慧（第1報告）は、第Ⅱ章「現代仏教界をめぐる宗教状況」を取り上げる。伝統仏教教団をとりまく社会環境の変化や、教団および僧侶が抱える危機意識とそれへの対応について、藤井の分析視角を踏まえつつ、本書出版以降の経年変化と現代の動向について整理を試みる。

問芝志保（第2報告）は、先祖祭祀・墓制研究の立場から第Ⅳ章「都市における墓地問題」を主に検討する。まず本章を、同書刊行当時における墓地問題、およびそれに対する行政や寺院の対応について詳細に描写した同時代的な資料として読み直す。加えて、同書が提示した、霊園が果たしうる社会的役割や、霊園が寺院に与える影響についての展望を、報告者による調査事例も提示しつつ今日的視点から検討したい。

大場あや（第3報告）は、同書第Ⅴ章「骨仏と脱宗教浮動人口化」をもとに、継承を前提としない墓制を焦点化する。藤井は、大阪・一心寺の骨仏を例に、参詣者や納骨者の実態について調査を行い、骨仏が当時の宗教浮動人口にとってどのような宗教的・社会的機能を有したかを明らかにした。その成果から藤井研究の先駆性と重要性を確認し、その後の墓制をめぐる動向と合

わせて比較・検討することで、本章における研究の意義を明確化したい。

黒崎浩行（第4報告）は、本書が「宗教集団の構造変化」に関する共同研究や、九学会連合による利根川流域調査の成果を含むことを踏まえ、藤井の関心と方法のもつ同時代的な共通性と藤井ならではの特異性を研究史的に位置づけるとともに、2000年代以降の「臨床仏教」や「人口減少時代の仏教」に関わる研究実践と対比した場合の意義を問う。

最後に小島伸之氏より、近現代の宗教変動という観点からコメントをいただいたのち、フロアとの総合討論をとおして議論を深めたい。

宗教をめぐる調査・研究の倫理

—現代的課題にどう向き合うか—

代表：平藤喜久子（國學院大學）

◆構成

【発表者】

弓山達也（東京工業大学）「減点主義から加点主義へ—関与型調査の研究倫理—」

櫻井義秀（北海道大学）「カルト視される教団への調査と圧力の諸相」

井上治代（東洋大学）「調査される側から見る研究倫理」

飯嶋秀治（九州大学）「調査倫理から教育ガイドラインへ」*非会員

【コメンテーター】

井上順孝（國學院大學）

【司会・趣旨説明】

平藤喜久子（國學院大學）

◆趣旨説明

研究倫理については、論文や実験結果のねつ造、盗用、二重投稿や「人」を対象とする場合の人権への配慮、安全への配慮や研究者間のハラスメントの問題など、分野を問わず研究者であるなら誰でもが考慮すべき事柄があり、ほとんどの研究機関等でガイドラインが定められている。

しかし、それだけではなく、研究分野ごとの特有の問題もあるのではないだろうか。

「宗教」という信仰に関わる事柄について、とくに現代の生きた現場を対象とする場合には、古代の文献を扱ったり、法律の解釈を行ったり、ウィルスの感染経路について研究したりする場合には生じないような課題が立ち現れてくることもある。

具体的には、教団という組織の研究や宗教的信念に基づいて活動をしている人、宗教的な体験をした人などへの調査・研究といった場面である。このような分野では、しばしばほかの研究分野では想定できないような宗教という事象固有の問題が起こる場合がある。これら宗教特有の問題について、個人で対応していくには限界がある。研究関心を同じくする人々が集う学会という場で、先達の体験などを聞き、問題意識を共有し、議論を積み重ねていく必要があると考える。

加えて、現代社会において「発信」は研究者の特権ではなくなっている。調査される側も SNS などを通じて自由に手軽に発信できる時代である。ときにその発信力は研究者をものぐさすることもある。ある特定の教団を研究者が調査をし、そのことが教団のホームページや SNS で発信され、社会的に権威があるとみなされる研究者が、あたかもその教団の活動に意義を認め、お墨付きを与えているかのような印象を醸し出すことも可能である。当該の研究者がどのような立場で、どのような関心からその教団を調査したのかが一般の人々に顧みられることはほとんどないのが現状だろう。研究者は自らの調査という行為が及ぼす影響について、これまで以上に注意深く考えをめぐらさなければならない。

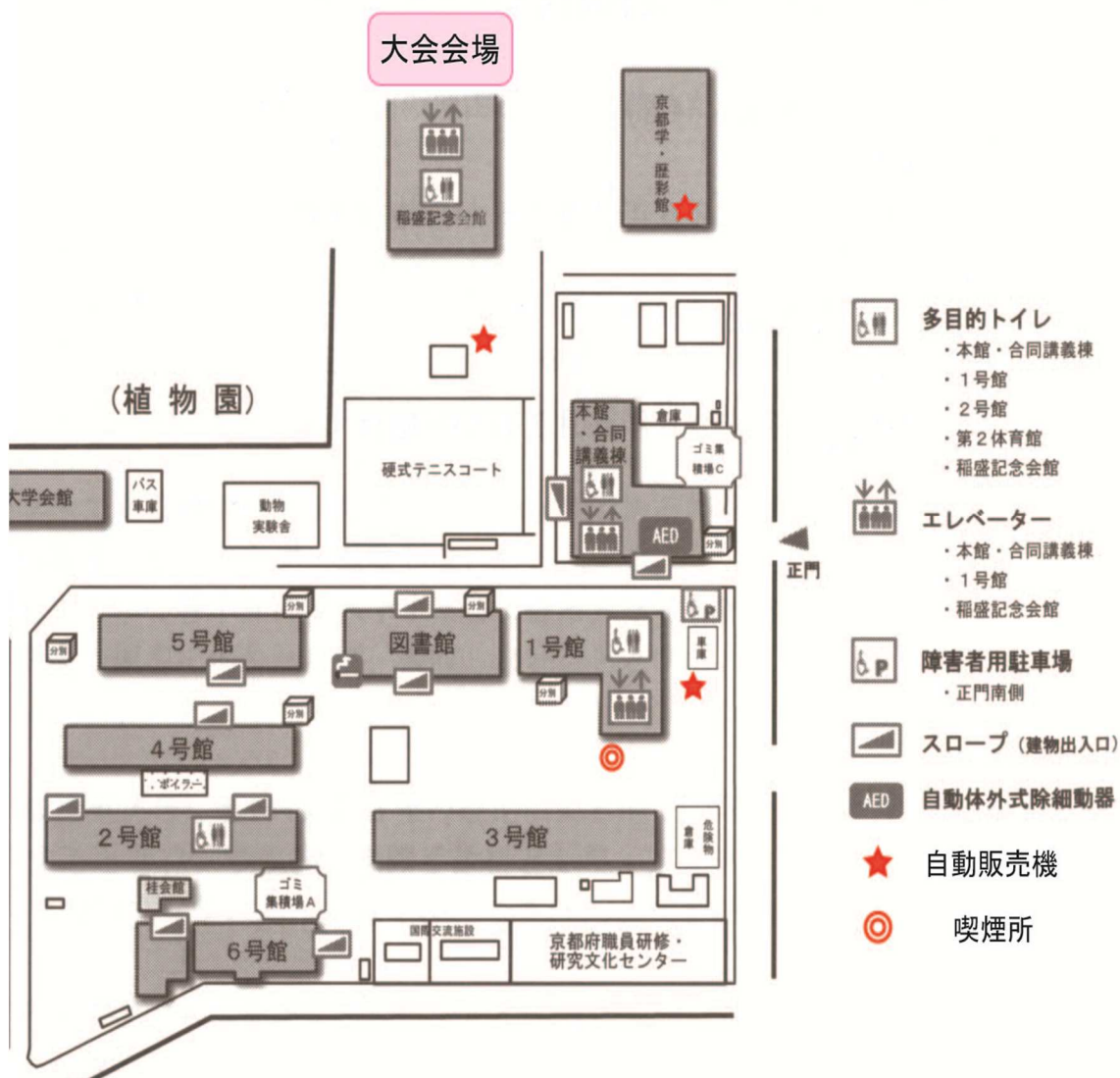
現代の情報化社会において宗教という領域を研究する。その調査、研究の倫理をめぐる、われわれはいったいどのような課題を抱えているのだろうか。大学教員として学生に宗教の調査を指導する立場に立つとき、与えるべき注意事項としてはどのような事柄があるのだろうか。

今回のテーマセッションでは、四つの観点からの発表がなされる。まず「関与型調査」における対象者との「間合い」をめぐる課題、すなわち調査方法に関する発表がある。次にカルト視される教団への調査に際して生じる研究者への圧力の問題について体験に基づく報告がなされる。これら宗教を対象とすることによって起こる特有の問題についての発題に引き続き、調査される側からみた倫理上の問題についての報告がなされる。そして最後に大学教育における調査実習をめぐるガイドラインを収集し、教員、実習者へインタビューを実施した経験を踏まえて、教育現場における調査実習が抱えている課題について発表される。

これら調査、研究の倫理をめぐる多様かつ具体的な事例に基づく報告を受け、コメンテーターからは、国内外の宗教教団の調査に長年携わってきた経験を踏まえてコメントがなされる予定である。

後半はディスカッションを広くフロアに開く。参加者には、実際に体験した問題や戸惑いなどを紹介していただきたい。とくに若手研究者やこれから本格的に宗教にかかわる調査を実施したいと考えている大学院生の方々には、疑問に思っている点や、不安に感じていることなど、忌憚ない意見を寄せて欲しい。そうした意見や疑問を取り上げながら宗教と研究倫理をめぐる課題について議論を深め、学会員の今後の研究活動の参考になるようなデーマセッションとしたい。

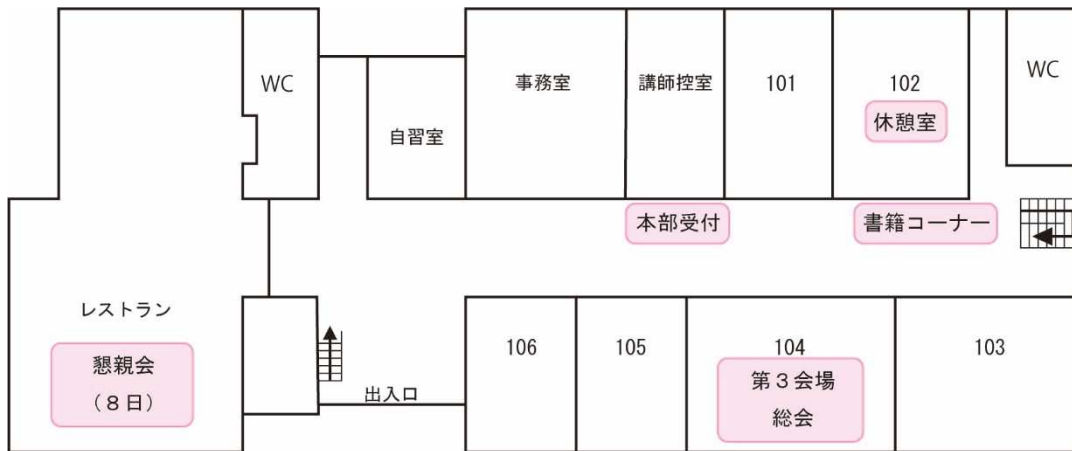
宗教と社会」学会第27回学術大会
会場案内・キャンパスマップ



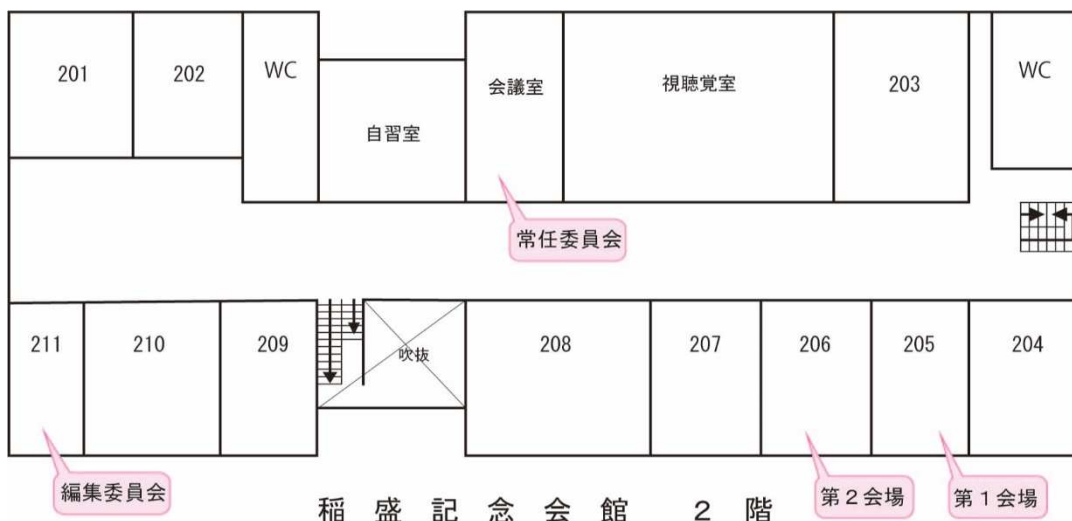
*キャンパス狭小につき、車でのご来場はお控えください。

*大会・懇親会は「稲盛記念会館」で行われます。そのほかの建物は使用しません。

会場配置図



稲盛記念会館 1階



稲盛記念会館 2階

交通アクセス

◎会場最寄り駅

京都市営地下鉄烏丸線 北山駅（京都駅から約15分） 1番出口から南に直進 徒歩6分
（観光シーズンにはバスの時間が読めませんので、地下鉄のご利用をお勧めします）

■ JR京都駅から

地下鉄烏丸線「北山駅」下車、正門まで南へ約600m

市バス4番(上賀茂神社行)「北園町」下車、正門まで西へ約300m

市バス205番(四条河原町経由北大路バスターミナル行)、206番(東山通経由北大路バスターミナル行)「府立大学前」下車、正門まで北へ約350m

■ 京阪出町柳駅前から

市バス1番(西賀茂車庫行)「府立大学前」下車、正門まで北へ約350m

市バス4番(上賀茂神社行)「北園町」下車、正門まで西へ約300m

京都バス32番(広河原行)、34番(静原城山行)、35番(市原行) 「府立大学前」下車、正門まで北へ約350m

■ 四条河原町から

市バス4番(上賀茂神社行)「北園町」下車、正門まで西へ約300m

市バス205番(北大路バスターミナル行)「府立大学前」下車、正門まで北へ約350m

